2023.8.13　平和祈念礼拝　S.M

「ラジオと戦争」（大森淳郎　NHK 出版 2023.6）を読んで考えたこと

今年の６月に出版されたばかりの本です。これだけボリュームのある力作ですから、色々教えられたことはあるのですが、感想をものすごく乱暴にひとことで言うなら「昔も今もＮＨＫの報道は信用できないね」ということです。

本書によれば、戦前戦中、電波は国や軍部の管理下にあり、「ニュースは客観的事実を伝えるものであってはならず、『主観的編集』によって『国策を強烈に反映』するものでなければならなかった。」（ｐ.56）とのことで、ラジオは報道ならぬ「報導」により国民を戦争に駆り立てるのに積極的な役割を果たしました。敗戦後は「民主化」されたとはいえ GHQ の管掌下、その後再び「国家管理」の下に置かれます。「公共放送であるがゆえに政府に協力するのが当然と考える人間が、NHK の外部にも内部にも少なからずいた」（ｐ.566）という記述も見られ、現在に至るまで、基本的には政府の方針に従うといった姿勢が続いているように思われます。

つい最近、「コロナワクチンの接種後に家族が死亡した」遺族が NHK のインタビューを受けたが、番組では恰も「コロナ感染により死亡した」と受け取られる形で報道され遺族が抗議したという問題がありました。背後に、コロナワクチンを推し進める政府の圧力または NHK 側の政府への忖度があったのではないかと想像してしまいます。（真偽は定かではありませんが…）

本書「あとがき」には、ETV2001（従軍慰安婦についてのドキュメンタリー）が政府要人（安倍晋三内閣官房副長官（当時））と上層部の意向で大幅に改変さ

れた問題のことも記されており、番組制作者の中には結果的にNHKを去った人もいたとのこと。著者もNHKで仕事をし続けることに悩み葛藤を覚えたと思われます。しかし、組織の中にいなければこのような膨大な資料や沢山のインタビューをもとにした本を世に出すことはできなかったわけで、長年の忍耐と闘いが生み出した成果であることを思うと、留まって闘うこともまた尊いことなのだとこの本を読みながら思った次第です。

さて、私は自分のこととして、二つのことを考えました。

① 本の中で著者が繰り返し自問自答している「(戦時中) お前がその立場に立ったらどうしていたんだ」ということと同様、自分が戦時中のクリスチャンだったらどうしていたか、またこれから戦争が始まったらどうするのか。歴史的平和教会であるアナバプテスト・メノナイト派の日本宣教が始まったのは戦後ですから、先輩の前例がないわけです。

1967年 日本基督教団の声明には次のようにあります。

…しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。
わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。
終戦から20年余を経過し、わたくしどもの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中にあって、ふたたび憂慮すべき方向にむかっていることを恐れます。この時点においてわたくしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります。

戦時中のキリスト教会、クリスチャンを断罪することは容易です。しかし、その時自分が生きていたら、またこれから同じ事態が起きたらどうなのでしょ

う。平和を実現するようイエス様から教えられているキリスト者として、戦争に協力することなどは絶対にできないと思うだろうから、昔ヨーロッパで迫害され北米、南米等に逃れていったメノナイトの人々にならって、まず私も逃げることを考えます。しかし逃げる＝今持っているものをすべて失うことであり、楽なようで決して楽なことではありません。そもそも逃げる場所があるのかも不明です。逃げるか残るか、どちらにしても大きな苦難があることには変わりありません。その時にならないとわからない、でも常に祈り備えていくことで神様が道を開いてくださると信じ、危機感を持って毎日歩んでいくしかありません。

「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。」マタイ 10：28

「あなたは力が弱かったが、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないと言わなかった。」黙示録 3：8

② 報道が信頼できないなら、どうやって真実を知り神の御心に従って行動すればいいのか。今のところ思いつくのは以下くらいです。

・色々なメディアからの情報を得る。

マスメディアの情報でさえフェイクニュースであったりする現在、まず疑ってかかること、また国内外、様々なソースからの情報を、その発信者の意図まで汲み取って自分なりに判断・消化していくことが大切だと思います。

・世界のキリスト者たちとの交流により自分の行動の指針を探る。

コロナ禍の副産物としてオンラインでの会議が一般的になり、海外のメノナイト教会のリーダーと顔を合わせる機会が与えられています。昨年は、香港メノナイト教会のリーダーから言論統制・弾圧の現状を聞き、同じアジアのクリス

2023.8.13　平和祈念礼拝　S.M

チャンとして、自分のこととして受け止め連帯していかなければいけないと感じました。また、MCC（メノナイト中央委員会―平和・救済組織）の韓国人スタッフからはとても耳の痛いこと（北朝鮮の現状は日本の植民地政策が原因であり、日本人はその歴史的事実を自覚することなく北朝鮮を徒に恐れたり敵視したりしてはいけない）を言われ、ああやはり韓国の方々の認識はそうなのだ、いやそれが世界共通の見方なのだろうと思い知ったこともありました。さらに、現在東京で奉仕されているニュフェルド師夫妻を通し、カナダメノナイト、MWC（メノナイト世界大会）アジア地区代表などの方々との交わりの機会も与えられています。日本の中だけで通用する「常識」だけでは神様の御心はわからない、現代の日本に生きるキリスト者としてどう考え、どう行動するのか、世界中の神の家族との交わりを通して日々模索していきたいと思います。

「…神は、キリストを通して私たちをご自身と和解させ、また、和解のために奉仕する任務を私たちにお授けになりました。」コリントⅡ5：18